

令和 4 年 8 月 29 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00609

研究課題名（和文）日本語談話の発想と表現に関する対照的研究

研究課題名（英文）Contrastive study of ideas and expressions in Japanese discourse

研究代表者

沖 裕子（OKI, Hiroko）

信州大学・人文学部・特任教授

研究者番号：30214034

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：依頼を談話単位におけるジャンルとして定位することによって、依頼談話というジャンルが日本語・韓国語・中国語で異なる特徴を持つことを理論的・実証的に明らかにした。談話は社会文化・意識態度・談話内容・談話表現の4層からなるとする同時結節モデルに立ち、各層別の記述を深めるとともに、4層の統合的展開として談話レベルのジャンル表現が成立することを示した。また、場面を構成する重要な要素である話し手と聞き手のありかたに注目し談話構築態度という仮説を提出した。日本語談話の談話構築態度は三項関係（浜田寿美男が初出）によることを指摘し、談話表現の特徴がこれによって左右されることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

対照談話論という新たな領域における方法論の開拓を行い、談話論の理論面の整備を行ったことに学術的意義がある。談話単位は、社会文化・意識態度・談話内容・談話表現の4層が同時に結節すると考える同時結節モデルに立脚し、依頼を談話ジャンルとして位置付けるという新視点を導入したことで、日韓中談話単位の理論と記述の両面に新知見を加えることができた。談話内省法に関して方法的妥当性の検証を計量的に行い談話論の可能性を広げた。本研究が行った対照談話論の基礎的研究成果をふまえて日本語接触問題が生起する要因を明らかにし、問題解決への端緒を開いたところに社会的意義があると思われる。

研究成果の概要（英文）：By localising the request as a genre in the discourse unit, it was theoretically and empirically clarified that the genre of request discourse has different characteristics in Japanese, Korean and Chinese. Based on the synchronous Grouping Model, which assumes that discourse consists of four layers: social culture, attitudes, discourse content and discourse expression, the study deepened the description of each layer and showed that genre expression at the discourse level is established as an integrated development of the four layers. In addition, the hypothesis of Discourse Construction Attitude was proposed, focusing on the state of the speaker and the listener, which is an important element that constitutes a scene. It was pointed out that the Discourse Construction Attitude of Japanese discourse is based on the Triadic Relationship (revealed by Sumio Hamada), and it was shown that the characteristics of discourse expression are influenced by this relationship.

研究分野：日本語学

キーワード：対照研究 対照談話論 依頼談話 同時結節 社会文化 意識態度 談話内容 談話表現

1. 研究開始当初の背景

談話表現は、日本語の中でも地域方言、社会方言ごとに異なっており、また、第2言語として使用される外国語母語話者の日本語変種においても差異がみられる。こうした異なる日本語変種の話手がコミュニケーションを行う際に、問題が起きることがある。これを総括して「日本語接触問題」と呼ぶ。日本語接触問題は、語彙や文法の問題ではなく、談話レベルの差異が引き起こしていると考えられる。

言語研究は、音のレベルから始まり、語、文と進み、談話レベルにまで進んできた。談話単位の研究は、言語学史の大きな流れからみればまだ緒に就いた段階である。そのため、日本語接触問題の解決をめざすには、まず、談話単位の研究的枠組みの検討から始める必要があった。

そこで、日本語、韓国語、中国語という系統も類型も異なる言語を巨視的に対照することで、談話的発想と表現の異なりを把握しやすくしようと考えた。これはいわば外から日本語談話を観察することに当たる。それと同時に、日本語内にある方言変種を共通語と対照させて談話的発想と表現の異なりの考察を進めようとした。これはいわば内から日本語談話を観察することにあたる。こうして、外からの分析考察と、内からの分析考察を行い、得られる観察視点を相互の研究に生かしながら記述を行うことで、包括的に談話論の理論的枠組みの構築につなげられると考えた。

以上のような談話論の基礎的研究を積み上げることで、日本語接触問題の真の要因を探り、解決につなげる提言を行おうとしたものである。

2. 研究の目的

研究目的を大別すると、次の5点になる。

対照談話論という新たな領域における方法論の開拓

日本語、韓国語、中国語の談話を対照させることによって外の観点から日本語談話の特徴を記述すること

日本語における方言変種と共通語変種を対照させることによって内の観点から日本語談話の特徴を記述すること

外の観点と内の観点を交差させることによって発想と表現の点から談話論の枠組みを整備し日本語談話の記述を行うこと

日本語接触問題の解決につながる提言を談話論から行うこと

3. 研究の方法

研究方法の特徴としては、次の3点が挙げられる。第1に、日本語、韓国語、中国語を母語とする日本語研究者が国際共同研究体制を組んで、談話の発想と表現に関する特徴を巨視的に把握する方法をとったこと。第2に、それぞれの母語、母方言と習得日本語変種に対する内省観察を深く照合する方法をとったこと。第3に、日本、韓国、中国、三か国の大学生を対象としたアンケート調査を実施し、内省観察の妥当性の一部検証を行ったこと。

また、理論的には、『日本語談話論』(沖裕子、2006年)で提唱された談話の同時結節モデルに立脚した分析考察を進めた(図1)。

時間的展開		
A	社会文化	
B	意識態度	
C	談話内容	
D	談話表現	

図1 談話の同時結節モデル(部分)

談話の同時結節モデルとは、社会文化、意識態度、談話内容、談話表現の4層が時間的に同時に結節され展開していくと考える談話モデルである。これによって、4層の各層における記述を

深めるとともに、4層相互の影響関係を探ることが可能になった。

4. 研究成果

研究成果の主だったものについて略述する。

- 1) 依頼を談話単位におけるジャンルとして定位した。これによって、依頼談話というジャンルが日本語・韓国語・中国語で異なる特徴を持つことを、理論的・実証的に明らかにした。
- 2) 談話は、社会文化・意識態度・談話内容・談話表現の4層からなるとする同時結節モデルに立ち、各層別の記述を深めるとともに、4層の統合的展開として談話レベルのジャンル表現が成立することを示した。以下に一例を挙げる。日本語での依頼は対人関係を崩しかねない。そこで依頼事を指定せず、察してもらった談話展開が丁寧である。他方、韓国、中国では、依頼を通じて親しい関係を維持構築する社会習慣がある。親しい人の依頼は原則として断らないため、相手が実現しやすいように依頼内容を指定する談話展開が丁寧である。
- 3) 場面を構成する重要な要素である話し手と聞き手のありかたに注目し談話構築態度という仮説を提出した。日本語談話の談話構築態度は三項関係(浜田寿美男が初出)によることを指摘し、談話表現の特徴がこれによって左右されていることを示した。一例を挙げれば、共話はこの三項関係によって可能になっていた。また、韓国語、中国語の談話構築態度は日本語のそれとは異なっており、言語による個性がみられることを示した。
- 4) アンケートによる計量的方法を用いて、談話内省法の質の一部を検証した。また、談話内省法では把握できない社会言語学的事実の一端を明らかにした。一例として、「はっきりとものを言うことが丁寧だ」ということについて「そう思う/そう思わない」から選択された結果を挙げる。「そう思う」という人の割合は、日本 47.2%、韓国 93.1%、中国 97.4%で、歴然とした差がみられた。丁寧さというコミュニケーションの基盤的感覚において言語差がある事実を明らかにした結果のひとつである。
- 5) 日本語内の方言変種については、敬語の体系と運用に焦点をあてた。相対敬語と絶対敬語の異なりを再考し、その接触地帯にあたる長野県の敬語体系と運用について整理した。また、松本方言と共通語の敬語運用を対照させ、両者の対人調整軸が異なることを示した。
- 6) 韓国語、中国語母語話者との日本語接触場面において生じる異文化摩擦の要因分析を、談話論の観点から行った。日韓については談話表現の差異はさほど問題にならず、人間関係のありかたの相違が摩擦要因となっていること。日中については、談話表現の組み立てにおける客観的把握と主観的把握の異なりが問題となっていること。ジャンル体系からみると日本語談話は談話種変換に特徴があり、その適切な使用には談話構築態度を導く必要があることを述べた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 沖 裕子	4. 巻 9(1)
2. 論文標題 「心に残る一言」について－内言と詩的機能の談話論的考察－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 沖 裕子	4. 巻 8-1
2. 論文標題 日本語の形と意味	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 21-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 沖裕子	4. 巻 7-1
2. 論文標題 対照談話論からみた日韓の省略	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 83-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 沖裕子・姜錫祐	4. 巻 62
2. 論文標題 国際調査からみる日韓大学生の依頼談話意識	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語学研究	6. 最初と最後の頁 97-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14817/jlak.2019.62.97	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 沖裕子	4. 巻 6
2. 論文標題 談話論からみた長野県北信方言の絶対敬語	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 総合文化研究所所報『學海』	6. 最初と最後の頁 21-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 沖裕子・姜錫祐・趙華敏	4. 巻 50
2. 論文標題 日韓中対照からみた日本語の談話構築態度－発想と表現の差を説明するモデルの検討－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本研究	6. 最初と最後の頁 65-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20404/jscav.2019.02.50.65	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 沖裕子・姜錫祐・趙華敏・西尾純二	4. 巻 21-1
2. 論文標題 依頼談話の発想と表現 異文化接触問題の解決をめざした日韓中対照談話論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 80-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 1件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 沖 裕子
2. 発表標題 一言がなぜ心に残るのか：談話の性格と資料性の考察
3. 学会等名 長野・言語文化研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 姜錫祐・沖裕子
2. 発表標題 国際調査からみる日韓大学生の依頼談話意識
3. 学会等名 韓国日本語學會（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 沖裕子
2. 発表標題 対照談話論からみた日韓の省略
3. 学会等名 科研費成果報告公開シンポジウム「日韓両語の「省略」は何を語るか - 言語の個別性と普遍性に向けて」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 沖裕子・趙華敏・姜錫祐
2. 発表標題 学術サロン発表：日中韓対照談話論の展望と課題
3. 学会等名 漢日対比語言学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 沖裕子・姜錫祐・趙華敏	4. 発行年 2022年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 356
3. 書名 日韓中対照 依頼談話の発想と表現	

1. 著者名 小林隆編 熊谷智子、篠崎晃一、沖裕子他著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 420, 251-269
3. 書名 コミュニケーションの方言学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>信州大学学術情報オンラインシステムSOAR https://www.shinshu-u.ac.jp/soar/guide/ 信州大学機関リポジトリ http://www.shinshu-u.ac.jp/soar/ 韓国日本語學會 http://dx.doi.org/10.14817/jlak.2019.62.97</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	姜 錫祐 (KANG SukWoo)	韓国カトリック大学・東アジア言語文化学科・教授	
研究協力者	趙 華敏 (Zhao Huamin)	北京大学・外国語学院・教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

韓国	韓国カトリック大学			
中国	北京大学			